
線香花火 ひと夏の思い出

ゆぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

線香花火 ひと夏の思い出

【Zコード】

N7944A

【作者名】

ゆぐ

【あらすじ】

平凡だった中学生活。その分、やつてきた高校生活は新鮮で楽しかった。そして初めてやつてきてた夏休み。僕に恋の風鈴は鳴るのか!?

第1章 訪れる夏休み（前書き）

夏休みといつもとで、今日次を少しお休みして中編小説（？）を発表します。

今日次も連載中なので5話以内に収めるつもりではあります。楽しんでいただければ幸いです。

第1章 訪れる夏休み

線香花火か、懐かしいな…。

僕は夜の堤防を歩きながら思つた。

今日は僕の町で年に一回ある夏祭りの日だ。

普段は寂しい感じのする町だが、今日だけは違う。

家々の明かりはもちろん、こういつた堤防までがにぎやかになる。僕はこれでこの祭りを迎えるのは、25回目になる。

そう、このお祭りで、その年以降そのことを毎年思つ出せばにはいられない年があった。

僕が、高校に入つたばかりの年にあつたお祭り。

16回目のお祭りだ 。

「蒼！ 明日の祭り一緒に行こうぜ！」

「おお、俺も行く！」

「おっし、じやあ3人で行くか」

僕の名前は“葉夏^{はなつ}蒼^{あお}”

県内でもトップクラスの（自分で言うのもなんだが）進学校『星楽^{せいらく}学園^{がくえん}』に入学できた。

中学からの成績もよくて、ずっと狙つていた高校だったので合格が分かつたときは、ものすごく嬉しかった。

どうせ真面目なやつばかりだろ…。と思っていたクラスメートも、とてもノリがよくて面白い一人に出会えて高校生活を楽しませる要因の一つになつている。

最初に話しかけてきた奴が、“風堂^{ふどう}秀太^{しゅうた}”

いかにも凄そうな感じのする名前で本人曰く「星楽なんて、誰でも受かるだろ？ 僕でも勉強なんてほとんどしてないぜ？」らしい…。ちなみに僕は中学1年の時から猛勉強していたのに、あまりにあつさり言われてしまい、ちょっと恥ずかしくなつて、ここにはそん

な奴ばかりなのか……？と、焦つたものだ。

俺も行く…と言つたのは“笠原 篤希”かさはら あつき彼はなかなか努力家だつら
らしくそこそこ苦労して入学したそうだ。

ただ、彼も裏があり、先生に勉強で喧嘩を売られ（本人談）それで
逆上して、勉強して受かつたいう。なんとも素敵な話だ。

こんなノリのいい一人だから学校も楽しい。勉強が辛くても苦にな
らない。

「おー、そこはもう夏休みモードかあ！宿題忘れんなよ！秀太！」

「何言つてんだよ！俺は宿題なんかしなくても余裕なのーー！」

そう言って、秀太は先生の突込みをうまくかわし、みんなを笑わせ
た。

もちろん、クラスのみんなともお互い仲がいい。

受験の競争相手という感覚はなく、お互いに励ましあうような存在
だ。

やはり、友達というのはこうでなくては…と、常に思つてしまつ。
何故なら、僕がいた中学校は3年の後期に入るとお互いに口も聞か
なくなり、分からぬ所を聞こうとしても「うつせえな！先生に聞
けばいいだろ！」と逆ギレされた。

もち、高校に進学しない奴はいた。そいつは最初は騒いでいたがク
ラスの雰囲気に気圧され、結局は静かになつてしまつ…といつ凄い
状況だつたわけだ。

「よーし、それじゃあ今日はここまでだ。夏休み中もだらけちゃい
かんぞ！宿題はもちろんのこと、課外にも積極的に参加するように
！」

キーン、コーン、カーン、コーン…。

先生がちょうど言い終えたときチャイムが鳴つた。

「よし、日直号令！」

「きりーつ。れい！」

日直の秀太のやる気のない声は、さきほどの先生の声とのギャップ
もあり、いつそうやる気なく聞こえた。

クラスのみんなは、一緒に下校する子同士が誘い合って教室を出て行つた。

「なあ… 夏休み中にはしいよな?」

静かな並木道を僕たち3人が歩いているとき、秀太が口を開いた。

「何が?」

「決まつてんじゃん! なあ 篠希?」

ここで、なにか分からぬ僕はむつとした。

「俺はもういるけどね」

そっけなく、篠希が答えた。

「え? うつそ、マジで! ?」

「じょーだん! いるわけないしょ!」

「は、はめたな~!」

2人が勝手に盛り上がつてるのが悔しくて、僕は大きな声で言つた。

「もう! いつたい、なんの話してるの! ?」

「お? 蒼はまだ気づかないのか? 冗談だろ? 彼女だよ。か・の・じ
ょ!」

感づいていながらも僕が一番避けてほしい話題だつた。
彼女、恋愛、交際…。そのどちらも僕は無縁だつた。
いや、自分から避けていたというほうが正しいだろう。

先ほども話したとおり、僕の学校はみんなが受験に必死だつた。だから、僕も自然とそれから離れていた。だが、みんながみんな“付き合つてなかつた”というと嘘になる。と、いうか嘘だ。
付き合つているグループは僕が知つてゐるだけで、結構あつた。
そう考へるとやっぱり自分から避けていたと考へるほうが正しいだ
ろつ。

なんでだろつ。やっぱり、僕には刺激が強すぎたのだ。

男女で付き合つて…、考えただけでも背中がむずむずしてくる。
ここは進学校だったので、そんな話題は一切ないと思つた。
だが、その考へは甘かつたのだ。人類永遠のテーマといつてもよい

恋愛を高校でしないのはおかしいと…やはりそういうことなのか。ただ、この二人のことを僕は大好きだったので、できるだけ話を合わせることにした。

「ああ、彼女ね…、僕もほしいなあ！」

「お、蒼もそう思つか？誰がいいんだよ？クラスの中で」

…予想外の展開になつた。ここで好きな人を言わされる羽目になるとは…。

まあ、でも好きな人をいうのは悪くない。自分の趣味が合つかどうか、確認できるし、万が一、両思いだつて時は…。

いやいや、考えすぎだ…。

そう、別に僕は恋愛が嫌いなわけではない。彼女が要らないわけではない。

ただ、刺激が強いというだけであつて可能であれば高校生活中に経験するのも悪くはない。

と、段々僕の思考回路が変わつてくる。

恐らくは…この二人の影響だらう。

この二人が僕をこれだけ変えているのかと思つと、少し嬉しい気持ちと少し不安な気持ちになつた。

「ん…とね、“水月優菜”さん…」

「おお…なかなかいい目してるじゃん！俺もあいつはクラスの中でもいいほうだと思うぜ！」

「うん、俺もいいほうと思う」

二人が賛成してくれたので、僕は嬉しくなつた。

「そうだよね！？可愛いし、優しいし！」

「まあ、頑張れよ！篤希は誰だよ？」

話が篤希にふられた。篤希は見た目がとても格好いい。制服をラフに着こなし髪型もきれいになびかせている。顔立ちも整つていてきれいだ。

「んー、俺？俺は同じクラスにはいないな…、秀太は？」

秀太もなんだかんだ言って、女子に人気がありそうなタイプだ。ト

ークも面白いし、顔も悪くない。美形ではないが女性を惹きつける
うな顔だ。

そう、考えると、自分が一番情けないような感じだ。

「俺もかな。っていうか、同じ学校じゃなくて前駅で会った子が忘
れられないんだよな」

「なんだよ、それ、名前も分かんないんじゃ駄目だろー？」

「いや、夏休み中に会ってメルアド聞き出す！」

「夏休み中にはつて…その子も学校休みじゃん」

篤希のするどい追い込み方に秀太は、あ…と口を開いてしまった。

そして、僕も篤希も大声で笑った。

笑うなよ！と言いながらも秀太も笑っていた。

こんな何気ない日常が楽しかった。ただ、みんなで話して笑いあつ
て…。

友達がこんなにいいものなんて、今まで気づかなかつた自分はビック
りしてた。

でも、これが当たり前ののだ。一緒にいて楽しいからと友達なんだ
らう。

彼らは…僕にとって生涯初めての友達だ。

そして、もう一つ…。

明日から、高校生活初めての夏休みだ！

第2章 光る夏と淡い恋（前書き）

えー、更新遅いですね。

意外に夏休みが忙しいのです（苦笑）

第2章 光る夏と淡い恋

チリチリチリ……！

容赦ない音が響き渡る。

「んつと、何時だ……？」

そして目覚まし時計を見てから気がついた。

「今日から夏休みだつた……じゃん」

夏休みの訪れにも気づかず目覚まし時計をセットしてしまつてしまつて……、なんどデジな事か。

しかし、安眠を妨害されたことより、夏休みの初日に早起きした自分が嬉しかつた。

「今日はお祭りだし、何かいいことがおきそうな予感……」

そんなことを考えながら、僕は布団から這い上がつた。

「おはよー！」

「え！？蒼？今日から夏休みなのよ？早起きなんて……！」

やはり、母も驚きを隠せないみたいだつた。

しかし、僕は目覚まし時計のことは黙つておひつと思つた。

「うん、なんか夏休みの初日に早起きするといい生活リズムが作れそうじやん？」

と、心中にもなることを言つておこた。

母は軽く微笑し、僕の朝食の支度をすると呑早に仕事へと駆けていつた。

「今日はお祭りまで、どうやって過ごすかなあ……」

僕はトーストを口に運んでおりながら、田舎を出てやりを考えた。

宿題か？いや、やっぱりやる気が出ないな。もう一回寝る？どう考へても、ナンセンス。

ゲームしようつか？なんかなあ……。

と、途方もなくなるような考えを僕は脳内で張り巡らした。

そして、食後のコーヒーを口に含んだとき、答えなんか出てこないなという答えに辿り着いた。

僕の夏休みの快進撃もここまでだつた。

食事を終え、僕は2階へと上がった。

なにか蒸し暑いと思つたら、窓が閉まっていたので、僕は急いで窓を全快に放つた。

一筋、二筋、三筋 数え切れない風が僕の頬を撫でた。

「気持つちいいー！」

僕は、大声で叫んだ。

夏休みの色合いが、空気にも浸透し僕を歓迎してくれるかのよう。外ではセミの鳴き声が聞こえ、並木道の葉も心なしか昨日より鮮やかな緑をつけているように見える。

空は、雲ひとつない青空。

僕の小さな憂鬱は、神々しい何かによつてかき消された。

僕はベットに大の字になった。

すると、水月さんに初めて“感情”を抱いた日のことを思い出した。

あれは…忘れもしない入学後の委員会を決める学級会。

僕は、特に何もやりたいことがないので挙手もせずぼーっとしていた。

しかし、途中で先生が「まだなににも立候補してない奴ー？残り物になるぞー！」と言つたので、僕は慌てて前を向いた。

ん？係りの数は1、2、3、4…あれは5人だから×5で11、12…39、40人分…。いやいや、うちのクラスは40人だ。

僕の数え間違いだ…。もう一度数えて… 40人だ。

まずい！何が残っている？

あとは5席…。

じゃんけんで負けた3人と僕とやる気のなさそうな篤希の5人だ。

秀太は早くに、室長に立候補して今は寝ている。

本当なら、室長と副室長で司会をやるのだが、副室長に任せっぱなしのよううらしい。

そのときの…といふか今もだが…副室長が 水月さんだ。

僕はすぐさま残りの席を見た。

体育委員、保健委員、黒板係り×2、花のみずやり（珍しい仕事だ）どれも、辛そうだつたり面倒くさそうな仕事だ。

「私達、2人で黒板係りやりますー！」

僕は声のするほうを振り返った。

仲の良い一人組の女子が、まず黒板係りへと立候補。僕は、このままスルーした。

二人組で立候補しているのに、割り込めるはずがない。

「じゃあ、後3人ですね」

水月さんがにこっと微笑んだ。

残り3つ ！

篤希がどうする？と言わんばかりに僕のほうを見つめてきた。ここは決まっている。

地味だが、恐らくは樂そうな“花のみずやり”だ！

僕は篤希に軽くウインクしてから、勢いよく拳手して言った。

「花のみずやりります！」

しかし、ここで事件が起こってしまった。

ここで、何故かみんなの視線があと残っていた一人の女の子のもとへと集められる。

なにか、顔を真っ赤にして手を半分上げた状態でいる。よく見ると目が潤んでいる。

そういえば、この子はクラスでもおとなしい子だった。

「ねえ、あんた！今、この子が立候補しようとしてたのに割り込むなんてひどいんじゃない？」

クラスの女子の一人が言った。周りのみんなも僕をいつせいに見つ

めてきた。

ただ、秀太は眠つていて、又篤希は笑うのをこらえているような顔だった。

僕はわきの下に冷や汗をかいていた。

やばい…！どうする…？

決まつているだろう、葉夏蒼！女の子を泣かせていいはずあるまい！

「じゃあ、じょんけんでいいですか？」

水月さんが、僕と泣いている女子を交互に見た。

「あ…間違えました！体育委員に立候補しようとしてたんですけど…！寝ぼけてたみたいですよ！」

と、一気にそういった。

「そう…じゃあ体育委員ね、篤希くんは保健委員でいいかな？」

水月さんは、またにつこり微笑んでいった。

「あ、ああ」

と、篤希も慌てていった。

みんなはシーンとして、それ以上何も言わなかつた。

休み時間になり、篤希がからかいにきたがあまり覚えてない。

僕はあの笑顔で、あのさり気ない優しさで、“水月さん”を好きになつた。

僕の意識は現実に戻り、部屋の天井を見つめていた。

今日のお祭りで、水月さんも来るだろうか？

来るだろう。なんせ大きなお祭りだ、町外からも人が来るぐらいだから。

会えるかな？会いたいな。会えるよ。

僕の願望は期待へと変わつていったが、やはりそんな良い偶然はないと頭の隅から突込みが入つた。

「これじゃあ、昨日の秀太のことも笑えないよな…」

僕は、昨日秀太が駅であった子にひとめぼれした話を思い出した。

そして、力なく苦笑した。

「会いたいよ…」

第3章 悠久の白きに包まれて

ふと目を開けた。

いつの間にか眠つてしまつたらしい。

僕は時計を見た。針は、10時をさしていた。

窓の外では、セミの鳴き声がやんでいた。それでも夏休み特有といふべきか、子供の声が聞こえる。

「あー、なんか時間の無駄しちゃつたな」

僕は自分に笑いを入れながらゆっくりと起き上がつていた。

水月さんのこと、あんなに思つてたのは夢だったのかな…？

なんか、凄い胸が苦しくなつた記憶がある。

ベッドに寝転がつたときからすでに眠つっていたのかもしれない。風が絶え間なく吹き込んでくるため、カーテンが容赦なく舞い上がる。

「お茶でも飲もう」

僕は、階段を下りていった。

お茶をコップに入れて、口元まで持つていこうとしたとき、夏休みの空氣を冷たい機械音が破つた。

トゥルトゥルトゥル…！

電話が鳴つている。

僕はコップをテーブルに置き居間へ向かつた。

トゥルトゥルトゥル…！

「分かつてゐよ、そんなに鳴らなくとも」と、小言を言つてから受話器を取つた。

「もしもし…」

「お、蒼？」

「秀太?どうしたの?」

「いやさ、夏休みの初日だし、祭りまで時間あるから遊びに行かね

？」

ああ、なるほど。それはいい考えだ。祭りまで遊んでれば、少しはこの正体不明の苦しみから晴れるだろう。

僕はそう思つて返答した。

「ああ、いいね！今からかな？」

「んー、今10時回ったところだら？11時にお前の家に篠希と行くよ。いいだろ？」

「了解！待ってるよ！」

「おう！」

そういうって、お互に電源を切つた。

うんー夏休みなんだよ！何も変なことを考える必要はないさ。思いつきり楽しもう！

もともと、僕は恋愛とは無関係だつたじやないか。今更、何を苦しむ必要がある？

昨日の二人と話してて、少し興奮して調子に乗つてただけさ。さ、2人が来るまでに用意して、お母さんにメモ残しとかなきやな。何の服を着ていこう？

おしゃれしていこう。今日は3人で楽しむんだ！

僕はそう自分で書いたお母さんへのメモに納得した。

「よしーこれでお母さんも分かるだろ！」

僕は自分で書いたお母さんへのメモに納得した。

“お母さんへ　ちょっと、友達と遊びに行つてきます
そのまま、お祭りに行くと思つので帰りは遅くなりまます 蒼”

「そろそろかな…」

時計を見ると11時を5分ほど回つていた。

僕は用意もして、着替えも終わり一人を待つばかりだった。
ピンポーン！

おー、わざをすれば何とやらだ。
僕は、早走りで玄関へ向かつた。

「おはようー元気だつたか?」

「おい、秀太、元氣だつたかつて昨日会つたばっかりだろー。」

篤希の素早い突つ込みに、秀太はまた口を“あ”と開けた。

「ははっ！秀太らしいよ。それより今日はどこに行くの？」

「ああ、俺と秀太で話してたんだけど、まだ祭りまで時間があるだろ？ほら、新しくできたショッピングモール、“紫陽花ブライト”はどうかな？」

「なるほどーあそこは僕も行つたことはなかつたよー行こうよー！」

僕達は自転車を駆けて街までの道のりを走つた。

風がよりいっそう気持ちいい。まだ日差しもそれほどきつくなく地上を暖かに包んでくれている。

僕は“夏の色”をもういちど体感した。

「それにしても6月に完成したからって紫陽花はないよなあ…」

「お、秀太にしてはまともな事言うな。でも、あそこはカツプルも多いし、年中“ジューングライト”モードらしいぜ」

「へえー、それは凄いね…」

僕は、篤希の情報通に少し感心した。そんな年がら年中よく恋愛ができるものだと。

「ま、今は夏休みだ。子供だつて多いはずさー」

篤希が、もつともなことを言った。

「はあー、意外に遠かつたね」

「まあ、こんな大きなショッピングモールだ。これぐらいの範囲なら、許容範囲さー！」

秀太が笑つていつた。秀太も体力はあるんだけど、少し勉強になつた。「ひとまず中に入ろうぜ？クーラーもきいているだろうしさ」篤希が促したので、僕達は中へと入つていつた。

「おお～、涼しいな！クーラーガンガンじゃん！」

「そうかな…、僕は外の涼しさもいいと思うよ」

「そんなことはいいからさ、どこに行く？」

これから、僕が受けた夏の施しをじっくり話そうと思つたのにそんなこととけなされたので、僕は少しがつかりした。

それでも初めて入る店なので、僕も中を早く見たいことに変わりはなかつた。

「ひとまず、ゲーセンじゃね？」

篤希も意見がないようだし、僕も目的が特になないのでひとまず賛同しておいた。

ゲームセンターは、やっぱり子供達が多くつた。

中高生はもちろん、小学生も何人かいる。やはり、夏休みのゲームセンターは子供達にとって特別な存在なのだろう。

「二人とも何やる？」

「ん～やっぱり格ゲーだな、篤希やらねえ？」

「いいぜ、俺に勝てるかなあ」

二人は、アーケードゲームのほうに歩いていった。

僕が提案したのに、なんで一人で盛り上がるんだよっ！
僕は心の中でそう言つて、一人の後を追つた。

第4章 風翠の夢に流れねば（前書き）

更新、限りなく遅いですへへ；
ごめんなさい。

それでも、今日からは頑張ります。

第4章 風翠の夢に流されば

「それつ、じじで「コンボ！」で…トドメ…
ぴこぴこーん！

「あー、やられちゃったよ…。篤希強すぎだわ」
広いゲームセンターで、秀太の抑揚のない声で呟いた。

「秀太が弱すぎるのでは？」

篤希が、見下すように言った。

「くう～、おい蒼！俺とやるうぜ？」「ええ！？僕？」

「逃げるなよ？ほらほら、向こうに行つて」

秀太に促されて、僕はゲーム機の向かいに行つた。
（すつ…！）

いすに腰を下ろすと、周りの空気が変わる。

ゲームセンター特有の空氣　、雑音が消える。

ここは聖地なんだな。

と、変に納得して僕は財布から100円を取り出した。

「お～い、いいか？」

「うん、お金入れるよ？」

秀太の問いに僕はそう言つて、お金をそつと入れた。

（勝てますようになら）

と、無意味なお願いをして　。

前半は秀太優勢だった。

慣れない格闘ゲームに、僕は秀太に攻撃を当たられない。

「それ、それつ！」

「ほいつと。蒼、ちゃんと並んでろよー。」

秀太の挑発に、僕は顔を引き締める。

「くそつ…！」

ぼこ、ぼこぼこー！

数発だがヒットした！

「おつ、ちょっとはやるようになつてきたな」

秀太は、へへつと笑つた。

人間は油断したときに足元をすくわれる事が多い。

それは、いつの時代でも同じだ。

秀太は 油断している…。

今が、チャンスだ！

「ふう…終わつたあ！」

「秀太、ぎりぎりだつただろ？次やつたら、負けるんじやないか？」

「な、なにを！いいか、次やつたら、俺は“お前”に勝つぞ！」

「はいはい、頑張つてね

一人の楽しそうな会話も、僕にはあまり楽しく聞こえない。

「負けたあ…」

惜しかつたのに。自分でもそう思つ。

最後には、攻撃もヒットしてきて、相手の攻撃パターンもわかるようになつてきたのに…。

やはり、前半の差が厳しかつた。

「まさか、蒼もあんまりやつたことなかつたんだろ？しちうがないつて！」

篤希が、僕の肩に手をかける。『『『いつときは、篤希は優しい。いつでも、人の気持ちを分かつてくれる。

「はは、いつでも相手してやるよ」

こういつときでも、秀太は秀太だ。いつもと変わらない、お茶らけ

調子で。

二人とも、僕にとつては大切な友達だ。ずっと、一緒だ。

だから、僕は思わなかつた。

この二人との絆が、あんな形に変わつてしまつとは。

「次はどうする？」

僕の呼びかけにみんながうーんと、唸つていると“その人たち”は現れた。

「あら、秀太君たちじゃん！こんにちは～」
後ろから女性の声がしたので、僕はふっと振り返った。

そして、僕の口はあんぐりと開いてしまった。

水月さんたちだ…。水月さん他3人。いつものグループだ。

「おっ、奈緒か？久しぶりだな！」

「何言つてんの？まだ、夏休み入ったばかりだよ？」

そう言って奈緒たちはけらけら笑つた。

それにして、こんなところで会うとは…。

僕は一人、赤面した。

「ねえ、一緒にボウリングしようよ。」

しばらく談笑していた中、奈緒が口を開いた。
え…、僕はそう思った。

正直、ボウリング等スポーツティなことは得意ではない。
水月さんがいる前で…。

「ねえ…、どうする？」

「いいんじゃね？俺らも何するか決めてないし」

僕のわざかな希望は、秀太に一蹴された。

「俺も賛成～、おもしろそうじゃん」

篤希も、賛成。僕の付け入る隙はない。

「じゃ、決定ね。早速行こうよ」

氣まずい…。いや、幸運だ。でも氣まずい…。

あれから、僕らはそれぞれ1対1になつて対話することになった。

秀太が奈緒と、篤希が鈴美と、…僕が水月さんと。

菜緒は明るくおもしろい。秀太と、話も合つだらう。

鈴美は少し男の前では性格が変わるが、基本的に誰にでも好かれる性格、篤希が好むのも分かる。

でも…僕らは何だ？

うーん、どうしよう…？

「あのね…、葉月くん？今まで、なんのゲームやつてたのかな？」

「え？ああ…格闘ゲームだよ」

いつもは、活発に話す水月さんの顔が紅潮する。それが何故か愛しい。

「あのね…、あ、おもしろかったかな？」

「うん、おもしろ…かつたよ」

今の僕もきっと顔がりんごのようつに赤いに違いない。

いや、タバスコのほうが正しいか。

「あのね…蒼くんでも…いいかな？」

「うん、じゃあ僕も優菜さんで…、い、いいかな？」

途切れ途切れ、見てるほうが苦しくなる。今の僕の声はそんなものだろう。

ちらと水月さん、いや優菜さんを見た。

え…？ いう顔をしている。

「も、もちろんだよ。あのね、これからは…その、よろしくね」
赤面して話す彼女、赤面して話す僕。

一人の思いは …

第5章　図の遅れについて（前書き）

かなり、更新遅いですね。
すいません、見てつてください。

第5章 置の瀧よつ生まれ出でて

最悪だ…。

「おっし、ストライク！」

秀太の声と呼応して、菜緒がキャーと叫び、ぴょんぴょん飛び跳ねている。

「あいつ、やるなあ…。これでまた離されたぞ…」

「篤希くん！うちらも負けてらんないよ！」

「おひ、俺に任せろ…！」

と、盛り上がりを見せていく。

何故こうなったかといつと話は30分前にしてかかる。

「やつぱり、男子と女子が組んで3レーン使ってやるやつめ！」

秀太のこの問いかけに、僕と水月さんを除く3人は、賛成！と叫び勢いでペアまで決まってしまった。

で、もちろんさつき話してたペア。僕は水月さんとだ。

普通の人ならいいとこ見せようと張り切るところであひつ。僕はいかんせんボーリングなどやつたことがなく、こことこを見せるも何もないものである。

そして肝心の点数は…、ガーターばかりで入れてない。

交代制なので水月さんが投げるときは点が入る。なんとも空しいものである。

「蒼くん、初めてだもんね、しょうがないよ」

ふわりと笑顔をかける水月さんに、僕の鼓動は早くなる。しかし、嬉しさとこうう感情はこみ上げてこない。逆に悔しさがこみ上がる。

情けない、情けない。秀太や篤希はあんなにできるじゃんか。僕にできないはずがない。

「今度は任せて」

僕は水月さんを見つめて微笑んだ。水月さんは心なしか頬を染めたように見える。

そんなことも気にせずに僕は、唇を結び前方を睨んだ。

10本のピン、一つ一つが僕に挑戦しているように見える。

僕はボールを後方へ振り上げた、そして…。

「残念だつたね~」

「ゴメンね、僕のせいだ…」

簿記はうつむき加減に話した。

「え！？ 蒼くんは、途中から凄くよかつたよ！そしたら、私が今度はミスつてばっかりで…」

水月さんは顔を赤らめた。

「蒼！このまま、6人で祭りに行こうってことになつたけどいいいか？」

「優菜もいいよね？」

篤希と菜緒が僕たちに呼びかけた。

またも、事後承諾。僕に権利はないのだ。

「うん」と一言だけ言っておいた。

水月さんも、菜緒に向かつて返答していた。

「じゃあ、早速行こうか！」

話がまとまつたようなので秀太が合図をした。

僕は、緊張の連続で結構疲れていた。今日一日で、何回ドキドキしたか、分からぬ。

そう、このときの僕は知らなかつた。

過去最大級のドキドキが、今日僕を襲つことを。

最終章 蒼き花にそ歌を乱るれ（前書き）

最終話です。

今まで、J愛読有難いございました。

最終章 蒼き花にそ咲き乱れ

すっかり夜も更けた。

そして、お祭りはすごい盛り上がりを見せていく。

僕も、例年通り楽しんでいた。

だが、ただ一つ、違うことがあった。

僕の隣に憧れの人人がいることが

「わあ、わたがし買おうよ！」

「ガキかよー、わたがしなんてさ」

篤希の皮肉に、なによと鈴美は怒っていた。
周りは笑い、いい雰囲気だ。

「水月さん、たこ焼きおいしいよ！」

僕は、たこ焼きをほおばりつつ水月さんに声をかけた。

「嫌…」

「え…？」

突然の一言に僕は動搖した。

「優菜つて呼んでつていたのに」

「あ、ああ、『メン…』、優菜」

今度はしっかりと優菜と呼んだ。

優菜はは、へへっと子供のように笑った。その笑顔がいとおしい。

僕は優菜さんとの距離が確実に近づいてることを感じた。

どつかーん！

和やかな空氣を、無遠慮な爆音が破つた。

「花火だ…」

僕は無意識に呟いた。

「ああ、やべつ！花火が始まる時間過ぎてるつー早く堤防に行こう

ぜー！」

秀太は一気に言い切った。

ここでもいいじゃないかという反対を押し切つて、秀太は堤防へ行きたいというので僕たちもぞろぞろと、堤防へ急いだ。

「やつぱり、ここで見るのは違つなあ～」

秀太は、花火を見ながら感嘆の声を漏らした。

みんなも、うんうんと頷いている。

夏の夜空を彩る、虹色のヴェール…、感動しないわけがない。

そんな時、優菜がとことこと歩いてやってきた。

そして、耳元でそつと呟いた。

「ちょっと来て」と。

僕は誘われるままに堤防の端まで歩いた。

「ねえ、どうしたの？」

こらえ切れず、僕は聞いた。

「線香花火買つてきたの。一人でやらないかな？」

二人でやらないかな？

ふたりでやらないかな？

…！

みんながいる中、僕と二人で？

僕はしばらく啞然としていた。

「駄目…かな？」

優菜が、恥ずかしそうに聞いてきたので、僕は慌てて了承の返事をした。

ぱちぱち…。

もう大きな花火も終わり線香花火の輝きだけが、僕らを包んでいる。静寂な暗闇が永遠をあらわし、この小さな輝きが、切り開かれる未来をあらわしているよう。

僕は決意した。

「ねえ、優菜？」

優菜は、なあに？という顔で僕の顔を覗き込んでいる。

「この線香花火と大きな打ち上げ花火…。同じ花火だけど光り方も規模も全然違う。それは、僕たち人間の人生も一緒のようなものだと思う。でも大きな花火が線香花火より美しいという人もいれば、その逆もいる。僕は線香花火みたいに生きたいと思うんだ。派手なことはしなくていいから、こうやって優菜と過ごせる時間を少しでも増やせればいいから…、だから…これからも僕と一緒にいてくれる？」

優菜はにこりと微笑んだ。

「線香花火買つてきたよー」

僕は、思い出から現実の世界に引き戻された。

「さ、一緒にやろう？」

もう、彼女に会って10年になる。このお祭りは、10年前からずっと変わらない。でも、僕たちは前に進んでいく。これからもずっと彼女のこの笑顔とやっていくだろう。

闇に輝く線香花火のように。

「おつー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944a/>

線香花火 ひと夏の思い出

2010年10月9日04時12分発行